

昭和初期におけるミシンの活用方法

—シンガークラフト—

How to use sewing machines in early Showa era

Craft with Singer sewing machine

池田 仁美 武庫川女子大学 助教

Hitomi Ikeda

Reserch associate,
Mukogawa Women's University

概要

シンガークラフトは、シンガーマシン会社が考案したミシン手芸の一種である。昭和8(1933)年頃に登場したが多くの記録は残っていない。シンガークラフトは、シンガークラフト定規を使い、定規に巻き付けた糸を土台布に縫い付けることで新たな素材表現を可能とした。ミシンは、洋服裁縫やミシン刺繍が主たる活用方法であると言えるが、昭和初期に新たなミシン手芸として紹介されたシンガークラフトについて解説する。

1. はじめに

米国シンガーマシン社は、明治33(1900)年に日本国内でミシンの販売を開始した。同社は、日本全国に分店を設置し、販売員と女教師、集金人を置いた。販売員は各家庭を訪問し、月賦での支払いによってミシンを購入させた。女教師は、代金の支払いの都度家庭を訪問し、無料でミシンの使用方法の指導を行った。また、シンガーマシン会社は、明治39(1906)年に東京市麹町区有楽町に女子を対象にしたミシン裁縫学校である「シンガーマシン裁縫女学院」を設立した。院長は、当時のシンガーマシン会社の極東支配人、秦敏之の妻の利舞子である¹⁾。「シンガーマシン裁縫女学院」は、前身の「ミシン裁縫女学院」(1904～1906年)から、「シンガーマシン裁縫女学院」(1906～1910年)、「シンガー裁縫刺繍院」(1910～1916年)、「シンガー裁縫院」(1916～1933年)というように名称や組織、指導内容を時代の要求に沿って変えながら昭和8(1933)年まで運営が行われたことがわかっている²⁾。1930年代までは、国内においてほぼ独占状態であったシンガーマシンであったが、昭和7(1932)年に発生したシンガーマシン会社の労働争議を経て失速した。さらに昭和12(1937)年9月10日公布の輸出入品等臨時措置法にてシンガーマシンの輸入に制限がかけられ、同年には家庭用ミシンの販売台数は国産ミシンが上回るようになった。当時のシンガーマシンの所有率は日本人世帯の1割である³⁾。

本稿で取り上げるシンガークラフトは、昭和8(1933)年頃に登場したミシン手芸である。筆者は、シンガークラフトの道具を偶然に入手したことからその存在を知ることとなった。シンガーマシン会社のミシン裁縫学校の廃校後、国産ミシンの台頭までの業績下降期間とも言える時期に大きな流行もなく廃れていったミシン手芸の記録をここにのこすことにする。

2. 家庭用シンガーマシンの活用方法

2-1. 裁縫

明治期から大正期にかけての家庭用シンガーマシンは、直線縫い専用のミシンであったが、押さえ部分に用途に応じた附属具を使用することで洋服特有の装飾や縫い代処理を効率的に行うことで、多種多様な裁縫が可能であった⁴⁾。例えば、縁のバイアス布をつける縁付け具、布端を三巻縫いする三巻具、ギャザーを寄せながら縫う襷取り具、自由に縫い目を作る刺し子縫い具などが挙げられる。日本におけるシンガーマシンの販売開始時において、シンガーマシン会社はミシンの使用用途を洋服裁縫に限定しており、同社の裁縫学校においても洋服裁縫教育を中心に教育過程が設けられた。しかし、洋服の普及が進まなため、秦利舞子は和服裁縫に適したミシンの使用方法を考案し、明治41(1908)年には「シンガーマシン裁縫女学院」に和服裁縫科も設置された。

2-2. ミシン刺繍

秦利舞子は、ミシン裁縫を女性の自活の手段とするべく、ミシン刺繍を米国から取り入れ、明治41(1908)年に同院で指導を開始した。ミシン刺繍は、家庭用のシンガーマシンを使用し、送り金を外して土台布を自由に手で動かすことで針目の長さを調整しながら土台布の下絵をなぞり、絵を描くように刺繍を施すものである⁵⁾。ミシンが裁縫ではなく手芸の道具として使用されることになった先例といえる。ミシン刺繍は、和服の半襟や帯にも施すことができ、修練は必要であるものの手刺繍よりも早く刺繍できたことから、ミシンの用途は着用する機会の多くない洋服裁縫からミシン刺繍へと移行していった。また、ミシン刺繍は内職にもなり、女性の自活の手段にもなった。シンガー社の裁縫学校が明治43(1910)年に「シンガー裁縫刺繍院」と名称を変更したことから、ミシン刺繍の教育の需要が高まったことが見てとれる。ミシン刺繍は洋裁の普及が遅れた日本において家庭用シンガーマシンの販路拡大の目的となった。

ミシン刺繍は、ミシンの活用方法の一つとして支持され、大正15(1926)年発行の『家庭實用ミシン裁縫新書』⁶⁾の構成は、前半が裁縫、後半がミシン刺繍になっている。昭和27年(1952)年発行の『主婦之友』二月号附録⁷⁾においても特集記事「内職としても有利なミシン刺繍の手芸」で帯や付け衿、ネッカチーフなどの作品が紹介されている。現在は、家庭用のコンピュー

キーワード：シンガーマシン、シンガークラフト、手芸、昭和初期

タミシンで自動的にミシン刺繍ができるようになり、裁縫手芸の一つとしておこなわれている。

2-3. ドロンワーク

ドロンワークは、現在も装飾手芸の一種として残っており、布地の経糸と緯糸を部分的に抜き、残った織り糸をかがりながら透かし模様をつくるものである。テーブルクロスやハンカチの縁などに使用する。主に手縫いでおこなわれる手芸であるが、ドロンワークへのミシンの活用事例は、筆者の調査によると、昭和27年(1952)年の『主婦之友五月号附録図解式ミシン裁縫独習書』の「内職として有望なミシンドロンワークとレースワークの基礎」⁹⁾が早い例にあたる。糸かがりの工程にミシンを使用する。

2-4. シンガークラフト

シンガークラフトに関する記述は、非常に少なく、シンガークラフトと称することから、シンガーミシンの関連書籍である『みしん裁縫ひとりまなび』(1909)¹⁰⁾、『みしん刺繍独学』(1912)¹¹⁾、『シンガー教育部裁縫学校講習ミシンモーター及附属品ノ管理及使用法ニ関スル講習科』(1923)¹²⁾、『改訂増補ミシン裁縫独学ビ』(1924)¹³⁾、『ミシン裁縫全書』(1927)¹⁴⁾、『最新シンガー式子供洋服の作り方』(1930)¹⁵⁾、『シンガー洋裁全書』(1937)¹⁶⁾、『増訂シンガー洋裁全書』(1943)¹⁷⁾を参照したが、いずれの書籍もミシンの使用方法としてシンガークラフトに関する記述はなかった。

唯一シンガークラフトについての記述があったのが、シンガースーイングメシアンカムpany発行の『シンガークラフト使用全書』(1935)¹⁸⁾である。同書はシンガークラフトの専門書で、シンガークラフトの用具の説明、シンガークラフト使用法、小児服・帽子・チョッキ・ジャケット類の作り方、飾り縫いの方法、手芸品の作り方、敷物類の作り方が記載されていた。同書においてシンガークラフトは、“最近シンガーミシン会社で考案された図のような金属製の定規に糸を巻き付けてそれを布や紙にのせてミシンを掛けた、ごく簡単に出来る趣味深い斬新な手芸でございます。これは刺繍の代用にも編物の変わったものにもなり、大小の敷物に、洋服に、ショールに、造花に、レース飾りや房などに、工夫次第で大変応用の広いものでございます。(中略) 欧米各国の手芸界では嵐のような賞賛を博し、日本にはごく最近まいったものであります。(中略) チョッキなり女児オーヴァーなりそれぞれ裁断した布の上を片端から刺してゆくと如何にも温かそうなフクフクとした織物風のものが出来上がります”¹⁹⁾という説明がなされている。このことから、シンガークラフトは、ミシン刺繍やドロンワークのように布に装飾を施すタイプの手芸の一種であるが、視覚的な効果に加え、布に厚みを増すことで防寒の役割や、素材感の変化を目的とした手芸であることがわかる。また、芸術的要素と実用的要素を兼ね備える、ミシンでしかできないことを謳った手芸であることがわかる。

シンガークラフトに関する記事は、昭和8(1933)年10月17日号の『時事新報』、昭和9(1934)年2月号の『婦人倶楽部』、同年9月の『婦人画報』にも掲載されていたことから、シンガークラフトは少なくとも昭和8(1933)年には登場していたといえる。



図1 シンガークラフトの作例²⁰⁾

3. シンガークラフトの方法

シンガークラフトの方法は、前掲の『シンガークラフト使用全書』¹⁸⁾及び、筆者の入手した実物のシンガークラフトの道具と付属の説明書から把握することができた。

3-1. シンガークラフトの実物資料

筆者が入手した資料は、購入者宛の書面、割賦購入の集金調書の保管袋、上記2点が入っていた郵便封筒、シンガークラフトガイド、シンガークラフトの説明書、シンガークラフトのアイロン転写図2種、転写図使用説明書、ミシンの附属具5種、ミシンの使用法を記載した小冊子である(図2)。封筒の裏面には、「シンガー裁縫機械会社」と印字がしてあり、和服姿の女性がシンガーミシンを使用する絵を含むロゴが印刷されている。封筒の差出人は「横浜市中央区山下町二百五十四番地 シンガー裁縫機械会社横浜中央店」で、宛先は東京市内某所某氏、消印は昭和10(1935)年10月28日である。購入機種は、家庭用本縫いシンガーミシン第十五種K八十三型(蛇の目型)(図3)で、集金調書によると、購入日は昭和10(1935)年10月19日、価格は285円である。割賦支払い金は、初回が30円、毎月の支払金が7円であった。ミシンの使用法を記した小冊子には、ミシンの附属具の取り扱いに関する説明はあったがシンガークラフトに関する記述はなく、シンガークラフトの説明書は別に添付されていた(図4)。このことから、ミシンの標準セットとは別にシンガークラフトの道具がつけられていたことがわかる。

3-2. シンガークラフトの工程

シンガークラフトでは、クラフト定規を基本用具として主に使用する。実物資料には含まれていなかったが、広幅定規と呼ばれる拡張具もあり、広幅定規をクラフト定規に継ぎ足して用いれば、房飾りを作ったり、特別な縫い方をしたりすることが可能である。クラフト定規には毛糸を巻きつけ、土台布と押え金の間に置き、クラフト定規のスリット部分をミシンで縫う(図5)。クラフト定規の上端には小型のナイフがついており、ナイフで毛糸の輪を切りながら手前に引き抜く。輪を残す場合は予めナイフを外した状態で引き抜く。引き抜いた後に再度押さえ縫いをする(図6)。これを繰り返して列を増やし、土台布全体に毛糸を縫い付けていくのである。



図2 入手した資料(筆者撮影)



図3 シンガーミシン第十五種K八十三型²¹⁾



図4 シンガークラフトガイド(クラフト定規)と説明書(筆者撮影)



図5 一列目の縫い始め²²⁾



図6 定規を抜き押さえ縫い²³⁾

輪の部分の処理の方法によって、土台布の表面に様々な装飾を施すことが可能である。図7の上段2段は輪を切らずに縫い付けている状態である。次の4段は輪を切った状態である。その下部は、更に糸を刈り込み、短くすることで糸の列の境界を目立たないようにした状態である。糸の縫い付ける際の密度によっても表面の表情は異なる。また、図7の様に濃淡2色の毛糸を同時に巻き付けることにより、独自の配色を楽しむことも可能である。

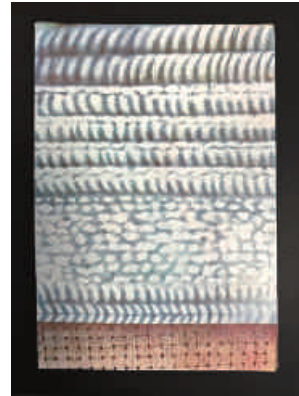


図7 シンガークラフトの工程²⁴⁾

シンガークラフトは、土台布に縫い付ける糸の色を部分的に変えることで、絵画の様な表現も可能である。予め、土台布に図案を描いておく必要があり、図案の描画を簡単にするためにシンガークラフト用のアイロン転写図が発明された。アイロン転写図のインキ面を下側にして布にあて、上からアイロンをかけると図案が布に転写される。図8はアイロン転写図の実物である。薄葉紙のような材質で、横84cm縦60cmの図案が2枚あった。『シンガークラフト使用全書』に記載のあった図案(A)~(C)²⁵⁾のうち、(B)、(C)の図案の転写図で、図8は図案(C)に相当する。転写紙には、約1cmの大きさの方眼に合わせるように図案が描かれており、図9のように、色の凡例によって各部の配色が決められている。図案(C)は、濃緑色、赤、薄緑、薄茶の4色が指定されていた。シンガークラフトでは、色の指定幅に合わせて定規に糸を巻き、一段ずつ縫い付けることで図案と同じものが完成する。筆者は、コンピュータ上で転写図の配色通りに着色をおこない、図案(B)と図案(C)の着色完成イメージ図を作成した(図10, 11)。



図8 アイロン転写図(C) (筆者撮影)



図9 図8の部分拡大



図10 転写図(B) 着色イメージ
(筆者作成)



図11 転写図(C) 着色イメージ
(筆者作成)

4. おわりに

シンガークラフトの特徴をまとめると、次の通りである。

- ①季節に応じて色調豊かで多様な手芸品を作ることができる。
- ②使用する糸は、毛糸、絹糸、人絹糸、アンゴラ毛糸、木綿糸、用布の細切れ、絹靴下の細切れ、麻袋の解き糸など様々である。
- ③糸を縫い付けることで防寒具を作ることができる。
- ④下絵の図画に合わせて色糸を配置すれば、絵画のような模様を作ることができる。
- ⑤古布や古糸など廃物を利用することで安価に楽しめる。

オリジナルの布を作るといった新しい手芸を展開したシンガークラフトはその発想自体が斬新であり、ミシンを所持する人に限られた手芸であることから、より先進精緻な手芸として導入されたと考えられる。シンガークラフトは、テキスタイルデザイン技法の一つと考えられるが、芸術的な要素よりも防寒や、丈夫な敷物など実用的な要素を重要視していることから、シンガーミシン会社の販促活動が背景にあった可能性が示唆される。また、従来の布帛を縫い合わせて作るぬいぐるみと異なり、シンガークラフトで作成したぬいぐるみは動物の手触りに近く、子供達にとっても新しい体験になったと思われる。

ミシン刺繍を主な使用用途とすることを前提にミシンを購入した者は、ミシン刺繍に飽きた後は他にミシンを使用する術を知らず、大正8(1919)年の調査では、所有者の3%しか実際にミシンを使用していなかったという²⁰⁾。シンガークラフトは、放置されていたミシンの新たな活用方法の一つとしてどの程度受容されたのかどうかは不明である。今後、シンガークラフトの手芸の位置づけをより明確にすることを課題としたい。

なお、昭和27(1952)年『主婦之友五月号附録図解式ミシン裁縫独習書』⁹⁾には、ミシン附属具の一つとして「リヤリード」の記述がある。リヤリードは、シンガークラフト定規と似た附属具で、シンガークラフトに似た装飾のできる手芸道具で大変興味深い。主婦之友代理部での通信販売もおこなっていたことから、シンガークラフトの後継的な手芸として受容されていた可能性があり、こちらも引き続き調査を進めたい。

注及び参考文献

- 1) ダイアモンド社編：世界の企業物語，ダイアモンド社，1969
- 2) 日本ミシン協会編：日本ミシン産業史，日本ミシン協会，1961

- 3) 池田仁美：明治末期から大正期におけるミシン裁縫教育 -シンガーミシン裁縫女学院の教育活動と実物教材の検討-，生活環境学研究，武庫川女子大学，No.4，56-61，2016
- 4) アンドルー・ゴードン，大島かおり訳：ミシンと日本の近代，みすず書房，2013
- 5) 池田仁美：明治後期から大正期におけるシンガーミシンの附属具について，横川公子編 関西文化研究叢書別巻 洋裁文化形成に関わった人々とその足跡-インタビュー集その4-，武庫川女子大学関西文化研究センター，33-35，2013
- 6) 秦利舞子：みしん刺繍独学，日本実業商会，1912
- 7) 佐野末子：家庭實用ミシン裁縫新書，創世社書店，1926
- 8) 内職としても有利なミシン刺繍の手芸，主婦之友二月号特大附録實用と趣味と内職の流行手芸全集，主婦之友社，1952.2.1
- 9) 主婦之友五月号附録図解式ミシン裁縫独習書，主婦之友社，1952.5.1
- 10) 秦利舞子：みしん裁縫ひとりまなび，シンガーミシン裁縫女学院実業部，1909
- 11) シンガーソーイングメシナカムパニー：シンガー教育部裁縫学校講習ミシンモーター及ビ附属品ノ管理及使用法ニ関スル講習科，シンガーマスファクチュアリングカムパニー，1923
- 12) 秦利舞子：改訂増補ミシン裁縫独学ビ，秦商店出版部，1924
- 13) シンガーソーイングメシナカムパニー（代表者アール マックリアリー）：ミシン裁縫全書，シンガーソーイングメシナカムパニー，三版，1927（初版1926）
- 14) メリー ブルックス ピッケン，木村俊吉訳：最新シンガー式子供洋服の作り方，シンガーソーイングメシナカムパニー（代表者イー エフ ウォーカー），五版，1930（1929初版）
- 15) シンガーソーイングメシナカムパニー（代表者イー エフ ウォーカー）：シンガークラフト使用全書，シンガーソーイングメシナカムパニー，1935
- 16) シンガーソーイングメシナカムパニー（代表者イー エフ ウォーカー）：シンガー洋裁全書，シンガーソーイングメシナカムパニー，十六版，1937（初版1936）
- 17) 木村俊吉：増訂シンガー洋裁全書，恵須商会，二十七版，1943（初版1936）
- 18) シンガーソーイングメシナカムパニー（代表者イーエフ ウォーカー）：シンガークラフト使用全書，シンガーソーイングメシナカムパニー，1935
- 19) 参考文献18)，口絵2
- 20) 実物資料「シンガークラフト用具使用法」より転載
- 21) 実物資料「シンガークラフト用具使用法」より転載
- 22) 参考文献18)，P.6
- 23) 参考文献18)，P.7
- 24) 参考文献18)，P.15
- 25) 参考文献18)，P.17
- 26) 大沼淳『文化服装学院40年のあゆみ』文化服装学院，1963